

第1章

序論

多様性と統合の課題

1 国民統合の遅れ

豊かな自然と資源

ペルーは複雑な国である。この複雑さと多様さは、豊かさや驚きを秘め、外部の観察者をとりこにする。だがそれは国としてのまとまりや有効な

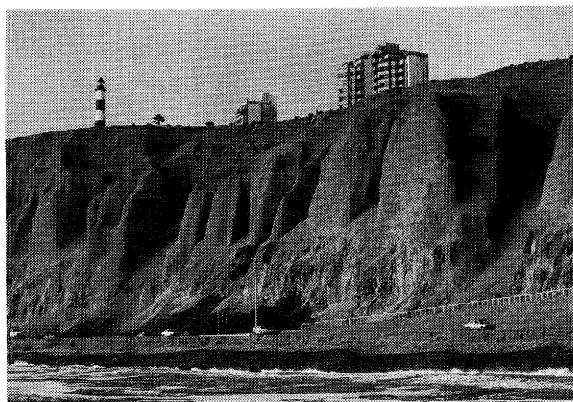
統治をはばみ、発展を困難にしてきた。地勢上は、南北に走る二本のアンデス山脈によって、コスタ（海岸部）、シエラ（アンデス高地）、セルバ（森林、ジャングル）の三地帯に大別される。

南北にのびる海岸部は細長い砂漠の帯である。アンデス山脈からの雪解け水が太平洋に注ぐ約五〇の川の河口にオアシスができ、農業が営まれ、集落ができ都市が形成された。首都のリマも、南北約三〇〇キロメートルの海岸部のほぼ中央、リマック河のほとりに位置する。一五三五年、征服者ピサコにより「諸王の都」として建設されたものだ。ペルーというアンデス山脈、高い山岳地を連想するためか、「ジープや四輪駆動でないとだめでしょね」と尋ねる人が多い。海拔ゼロメートルに近い海岸部に首都があり、主たる産業と人口を呑み込み、まして砂漠の真ん中にあることを知る人は意外に少ない。

緯度からみてリマは熱帯に位置するが、太平洋を南から北上するフンボルト寒流の影響で、

夏でも涼しい。年間の平均気温は一八度前後にしかならない。冬の間（五～十一月）は厚い雲におおわれ、憂鬱なオパール色の空がいつまでも続く。冷たい海水によって空気が冷やされ、安定した厚い雲層ができるためだ。ガルúaと呼ばれる霧雨があるぐらいいで、一年を通じて雨らしい雨は降らない。だが、冬の湿度は常時九〇%以上と高い。アンデスの山裾が海岸まで迫り出しているところでは、濃い霧と湿気のため、砂漠に植物が地生し花が咲く。ローマスである。砂漠は生きている。砂漠と湿度の高さの共存、この気候は、一般の日本人には想像し難いだろう。ペルーの国民性が他のラテン諸国と比べて暗いといわれる理由の一端を、この気候風土に求める向きもあるが、あながち的外れではないかもしれない。

海岸線は遠浅のところは少なく、海水浴に適した



海岸部は砂漠地帯となっている(リマ市)

良好なりゾート地も少ない。リマの海岸部は、砂浜でなく砂利の浜辺が多く、コスタベルデなどでは靴を履いて水浴びをする。急に深くなっていて波も高い。サーフィンには絶好だが、危険なところも多い。筆者も十年ほど前に溺れそうになり、高波に戻されながら必死で岸辺に泳ぎ着き、気づいたときは結婚指輪が無くなっていた苦い思い出がある。しかし今やそこもバスで大挙する民衆で埋め尽くされている。中間層以上のリメーニョ（リマの人々）は首都を離れ、パンアメリカン道路沿いの浜辺に車を止めて思い思いに肌を焼くのだ。

海岸部から五〇キロメートルも東へ進めば、アンデス山脈の懷に吸い込まれる。海岸部寄りの西側山系は、雨が降らないため不毛な禿げ山である。二本のアンデス山系の谷間、標高二五〇〇から四〇〇〇メートルの間に開ける溪谷と高原地帯は、温暖から冷涼までさまざまだが、乾期と雨期に分かれる。たぐい稀な力をもつて環境に適応し、ジャガイモを中心とする農耕、リヤマやアルパカなど牧畜を高度に発展させたインディオ先住民の生活の拠点である。豊穡なアンデス文明が育まれた中心地だ。インカ帝国は、クスコを拠点に高地一帯を征服して四〇〇万平方キロメートルからなる一大版図を築いた。かつてスペイン系白人たちが「インディオのしみ」と軽蔑を込めて呼んだアンデス南部は、ケチュア、アイマラ族を中心に歴史的に人口稠密の地帯であった。

アンデス山脈の東側斜面は、セルバ地帯へと通ずる肥沃な地域である。トウモロコシ栽培を

中心とするアンデス農民の生活圏の一部だった。一九六〇年代以降はアンデス農村から入植が進み、今日ではコカイン（麻薬）の原料であるコカの葉の産地でもある。アマゾン河の源流であり、熱帯雨林のジャングルが広がっている。ここは歴史的に人口希薄だが、アシヤニンカなど五〇近い部族が今日でも生活を営んでいる。

これらの三地域をさらに細かくみれば、地理学者ブルガル・ビダルが区分したように八地域に分けることができる。高度差により多様な生態学的階床が築かれ、緯度や海流との多様な組合せによって、一つの国のなかに世界のあらゆる気候帯が共存しているといってもよいのである。それだけに自然環境は、コントラスト鮮やかである。

資源も多様である。寒流と赤道暖流とがぶつかりあう沖合いの海域は、世界的にも有数の漁場の一つである。一九七〇年代初頭、ペルーが漁獲高世界一を誇ったことはよく知られている。堅口鰯を原料とする魚粉産業は、ペルーを代表する産業であり、最近もブームが再来している。しかしときに赤道暖流が強力となり南下すると、エル・ニーニョ現象を引き起こし、魚種が変化する。漁業が不振の時期があったのは、乱獲など政策の失敗もあったが、こうした自然環境の変化にも一因がある。またエル・ニーニョは自然災害の原因ともなり、河川や幹線道路を寸断し、アンデスには干ばつが襲うことになる。

農業では、広く知られているように、この山岳高地を原産としているものにジャガイモやト

マト、タバコ、カボチャなどがある。多様な地理的生態学的条件を反映し、熱帯の果実やコーヒ、綿花、砂糖など農産品のほか、ぶどう、みかんなどの温帯の果物、また米、野菜にいたるものでできないものはない。農産品の多様化には、中国系や日系の移住者の貢献も大きかった。スペイン人の新世界征服の目的はなによりも金、銀にあったが、鉾産品も多様である。銅、亜鉛、金、鉄、石油など、これほどモノカルチャーからほど遠い国もないだろう。

はばまれた国民形成

では、自然環境や資源の面でこれほど豊かな国が、なぜ発展を阻害されてきたのか。その根本的な理由を突き詰めてゆくと、やはり国民統合の欠如、国民形成の遅れに突き当たるといわざるをえない。ペルーの自然は豊かではあるが、基本的には砂漠と高地、ジャングルであり、全体として険しく、苛酷で、コミュニケーションをとることが困難である。農耕地は全国土面積の一〇％に満たない。今日でもアンデスやジャングル内部は、町や村落が点々と散在する人口希薄な地域であり、行政の空白や権力の真空が容易にできやすいのである。

その多様性と豊かさを活かすためには、領域を充分に掌握し、多様な要素を組織・統合し、さらには共通の目標に向けてそれらを動員する強い力が必要といえよう。インカ帝国はなら独自で発明するものはもたなかったが、アンデスの既存の部族が育んできた組織原理を、帝国大にまで拡大し組織化したところにその偉大さがあったというべきである。スペイン征服以降

この方、それに相当する力をもつ政府は生まれていない。

国民統合をはばんできたのは、民族的な要素も大きい。そもそもアンデスの土着社会を同質な社会とみるのは誤った見方である。少数のスペイン人が容易に征服をなし遂げたのも、ワンカ族などインカに敵対する部族がいたためだ。その苛酷さからインカ支配に敵意を抱いていた部族は多かった。植民地最後の大規模な土着反乱となったトゥパク・アマル二世の反乱や独立戦争の際に、スペイン軍の側に立って戦った部族が多く存在した。ケチュア語はいくつもの方言に分かれており、ケチュアとくくれる民族もまた一様ではない。

スペインの征服は、親族関係を基礎とした共同体（アイユ）社会に、まったく異質な西欧キリスト教文化を暴力的に押しつけたわけである。ほぼ三世紀の植民地支配により、アンデス社会は固有の文化構造を破壊され、世界的意味連関を失った。さらに征服にともない持ち込まれた天然痘などの伝染病や、苛酷な収奪の結果、先住民人口は激減した。征服時のペルーの人口約六〇〇万に回復するのは、征服後四世紀を経た一九四〇年代という、ごく最近のことである。驚くべき人口の減少とまた緩慢な回復である。

征服と収奪は、アンデス社会に父権の喪失ともいふべき深い傷跡を残した。収奪のひどさゆえに住民たちはインカの苛酷さを忘れ、「インカリ神話」などインカ再来の神話、広い意味で「アンデスのユートピア」をつくり出した。末端のインディオ民衆がキリスト教に表面で同化



インディオの家族(CARETAS 誌提供)

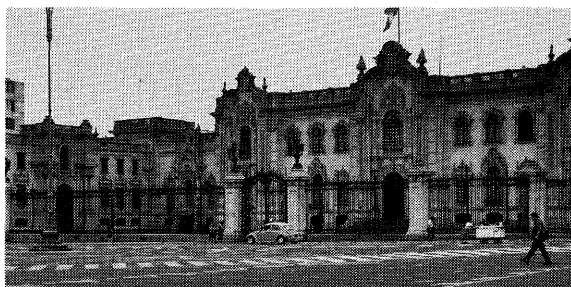
しながらも、アニミズムを主体とする独自世界を巧みに再生していくのに対し、先住民指導層はスペイン化され、民族意識をしだいに喪失した。土着反乱はことごとく弾圧され、先住民はインカの末裔としてのアイデンティティを失う。こんにち彼らの帰属意識は、ミクロな次元に分解し、その属する共同体を越えるところにそれを求めることは困難である。

また現代ペルー社会を、南アフリカの隔離された人種社会と重ね合わせて考えるのも現実から離れている。白人支配層を追い出せば民族国家が形成されるアジア・アフリカ型の民族解放運動の図式も当てはまらない。北米のような家族単位の入植と異なり、私的事業として一攫千金を夢見て征服が行なわれ、女性を同伴せず、征服者と被征服者の間で混血が進んだからだ。長期の植民地支配

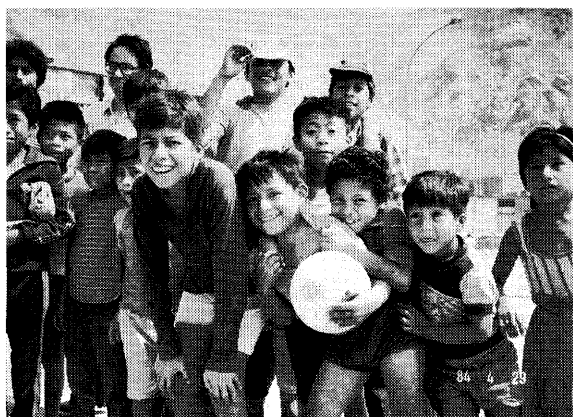
と独立後の土着白人層の支配のなかで混血化はさらに進行し、どこまでが白人でインディオなのかという境界線が不明瞭となった。混血とはなによりも文化的概念である。土着の要素を捨て、スペイン語を話し、共同体を出て都市で生活すれば広く混血とみなされる、そういう世界が広がったのである。

さらに奴隷貿易による黒人の存在、十九世紀以降の非スペイン系白人、中国人、日本人など東洋系の移民が続き、多民族性はさらに強まった。ペルーは民族的にオープンな社会で、日系社会から大統領が誕生することすら許容したのであるが、その外に向けて開かれた開放性が、逆に統合を困難にしてきたことも事実である。

そしてメキシコと異なり、国民統合を推し進める改革や運動が遅れ、現代までペルー人としての自我の確立や文化の涵養には成功していない。「代表的ペルー人とは」という問いかけ自体が実態をとまわらない。「ペルーを語ること自体が言葉の乱用となる」といった認識が、知識人の間にあるのも不思議では



ヨーロッパ風の荘重な建築の大統領宮殿



スラムの子供たちの表情は明るい

ない。二五年前まで大統領宮殿は「ピサロの館」と呼ばれ、いまでも宮殿に向かって左側に鎮座しているのは、独立の英雄ではない、ピサロの馬上の像だ。宮殿内には「トゥバク・アマルの部屋」があるが、征服者を否定できず、反乱者をその主たる統合の柱とすることもできない。それがペルーの統合をめぐる偽りのない現実である。「サッカーだけがペルー国民を統合する軸だ」というのもあながち誇張ではない。民族意識や愛国的連帯感の希薄な国民である。ペルー研究者の間での共通の認識は、ペルー社会にある種の「群島」として特徴づけることであった。ペルーという国は、地理的民族的のみならず社会文化的、経済的に異質な島々に分かれ、相互の意志疎通の困難な「群島」として成り立っているとするイメージである。民族、市場、国家、社会との、異質で多様な接合の段階と形態が共存し、せめぎ合っ

いるのである。

だが第2章でみるように、一九五〇年代以降、アンデス高地から農民が海岸部都市へ流入する社会変動が進行している。市場経済は高地まで浸透し、経済危機の影響も奥地まで波及しつつある。その過程で混血化が加速されるという文化的民族的大変貌をわれわれは目撃しているのである。今日、純粹なインディオ住民は三五%弱、そのうち文化的にも純粹に土着の生活を送っているのは、おそらく一〇%にすぎないだろう。総混血化が進んでいるのである。海岸部都市にアンデス高地から降り立った農民たちは、西欧文化を摂取し、それにアンデス的な息吹を与えている。統合を混血的な都市文化を軸に進めることが必要となつていたのである。

こうした現象を真の国民統合につなげ、ペルーという個を確立し、それを発展にまで推し進めるには、長期的な展望と、新しい指導性、力強く創造的な思想が必要とされよう。まさに急激に変わり、「新しいペルー」が形づくられるべき歴史的節目にペルーは立っているのである。

2 均衡を欠いた経済発展

黄金の台座に すわった乞食

経済開発のあり方も、ペルーの発展を不均等にしてきた要因である。メキシコのように植民地経営の中心は、先住文化の中心を破壊してそこに建設されたわけではない。クスコではなく海岸部リマに首都を建設したのは、高地アンデスの険しい障壁、圧倒的な数の先住民に対する恐れという要素のほかに、金銀の積出し港としての天然の良港カヤオに隣接した立地のもつ意味が大きかっただろう。リマは植民地と本国スペインとを結ぶ中継点として、外に開かれた発展をこの時運命づけられた。高地農村と農民たちが、大土地所有者の半封建的な支配に委ねられたのに対し、海岸部は主に白人居住の地として西欧文化を外から摂取し、アンデス民衆の血と汗で贖われた富を本国に送り出す接点となった。ここに民族と文化、さらには産業の二重構造が決定づけられたのである。

資源が豊富なことも、逆説的だが、この国の発展を不均等にしてきたし、地道な経済運営をないがしろにする原因となった。豊富な資源による時として訪れる経済ブームは、資源に依存する安易な開発思考を植えつけ、近代的な国家行政機能を発達させる機会をも奪った。一次産

品の開発と輸出に特化する産業構造と外資に無制限なレッセフェールの伝統を形成してきたのである。

独立の後、地場産業を重視する保護主義の流れがみとめられたが、海岸部に堆積されたグアノ（海鳥の糞）が、ヨーロッパの農業用肥料としてブームを迎えたとき、簡単にレッセフェールに道を譲った。グアノ産業は海岸に長年にわたり数十メートルにも堆積した海鳥の糞を掘って運び出せば金になったからである。政府はその開発と輸出を通じて、独立戦争時の国内債務の整理をはじめ、官僚機構や鉄道（リマ・カヤオ間、一八五一年開通）など都市基盤の整備を行なったほか、それを担保に英仏資本から融資を受け、当時としては狂気ともいふべきアンデス越え鉄道建設に着手した。この過程で文民・資本家層の経済基盤が確立し、一八七二年、独立後初の文民政権が誕生するが、英仏資本への債務は膨張し、皮肉にも深刻な債務危機に陥った。初代文民大統領のマヌエル・パルドは緊縮財政を敷き、反軍思想もあり軍備強化を怠ったため、チリとの間に軍事的不均衡をきたす。その後、硝石地帯をめぐる勃発する「太平洋戦争」（一八七九―八三年）でペルーは大敗を喫し、南部タラパカ県を失った。敗戦後、大統領に就いた将軍カセレスは、荒廃した国土を再建するため、一八八九年英国債権団を代表するマイケル・グレイスとの間で「グレイス協定」を結び、債務の肩代わりに債権者側に鉄道、港湾施設などの権益を六六年間にわたり譲渡することで債務問題を解決したのである。

十九世紀末には、先進国の工業化の成熟とそれにとまう都市社会の需要に応じて、砂糖、綿花を生産するプランテーション農業が海岸部の灌漑地で飛躍的に発展した。輸出向け大農園では、アスピリヤガなど伝統的スペイン系家系のほか、イタリア系移民のラルコ、ドイツ系移民ヒルデマイスターなど外国と結びついた地主資産家の手による土地集中と垂直的統合化が進んだ。金融業など関連産業も発展し、砂糖貴族ら特権的富裕層による寡頭的な文民支配、歴史学者ホルヘ・バサドレのいう「貴族的共和制」の時代が世紀末に確立する。海岸部の大規模に発展する資本主義的な輸出農業と、それとは対照的に、アンデス高地では伝統的なアシエンダにおける半封建的自足的農業とインディオ共同体という二重構造が顕著になった。

開放経済と

遅れた工業化

銅を中心とする鉱山部門は、セロ・デ・パスコなどへ米系資本が進出、また北部タララの石油油田も一九二四年に英国資本から米系スタンダード石油の子会社IPC（国際石油会社）の手に移るなど、米系資本による開発が進められた。政府は、鉱業法により積極的な外資優遇策をとり、典型的な開放経済体制をしき、工業化への関心を失ってゆくのである。まさにレッセフェールの伝統が、外資と協調する支配層への富と財の集中を可能にしてゆくのであって、そこにおいて国家の役割は、「分別ある主婦のごとき」きわめて限られたものであった。これがクリオーリョ・リベラリズムと呼ばれるペル一の経済自由主義の伝統である。

ラテンアメリカでは、世界恐慌で一次産品輸出に基づく発展パターンが危機に陥り、それに対処するため、民族主義の下で産業資本家と中間層、労働運動による工業化を指向する政治的再編成が進んだ。国家主導型の輸入代替工業化が推進され、失業など社会問題に対しケインズ主義的対応がなされたのである。しかしペルーでは、民族主義的改革勢力であるアブラ運動（アメリカ人民革命同盟）が政権獲得に失敗することもあり、そうした再編はなされなかった。世界恐慌による危機は、むしろオーソドックスな引締め策と、輸出産品の国際価格の回復を待つことで乗り切られ、基本的に開放経済体制が維持されたのである。

この開放経済は一九五〇年代に入りさらに徹底し、米国資本を中心とする大量の外資が、鉱業のみならず漁業、金融などの分野にも進出した。工業化への関心は、ようやく五九年工業振興法の制定ののち、六〇年代のベラウンデ政権下で政策的に強められるが、基本的に外資にオープンかつ無原則で、政府の産業政策を欠いたものだった。六八年の軍事クーデター前夜に、外資とそれと密接に提携した少数有産者の手に資産が集中した。フィッツジェラルドの研究によれば、米系の三企業が鉱業部門を支配し、輸出総額に占める米系企業のシェアは約五〇％に達していた。外資は、鉱業部門の四分の三、製造業、漁業の二分の一、金融、通信の三分の二を支配し、ペルー経済を左右していた。この経済体制を率いてきた寡頭層は、開放経済の下で外資の支配下に入り、寄生的性格を強めてしまったといっても過言ではなかったのである。

植民地時代の収奪、独立後二〇世紀にかけての自由主義的経済と産業基盤の外資の独占的支配は、全般的に不均等な経済のあり方と、国民社会全般の遅れを決定づけた。そしていうまでもなく寡頭支配と外資に対する民族主義的な反発を生み出し、混血の中間層の知識人や政治家たちに、反帝国主義や従属論的解釈への広範な支持を与えた。もともとインカ帝国に寄せる偉大な過去への郷愁があるところである。外資の浸透とその独占的地位の確立は、ペルーは元来豊かな国であるが、外国勢力がそれを収奪したとする意識を必要以上に広く定着させざるをえない。発展のためには、たゆまない自己努力や犠牲、勤勉といった要素が重要であることが等閑視される。自己犠牲よりは他者への批判、責任転嫁と、悪く言えば過度の被害者意識や発展への後向きの考え、悲観論や諦観が広まることになった。

3 政治文化の重み

強い権威主義文化

ペルーは南米諸国のなかで、最も土着文化が花開いたところだが、同時に、ほぼ三世紀にわたる植民地支配の牙城でもあった。土着の伝統とスペインの伝統が、現代の政治社会に深く影を落としているとしても不思議ではない。

インカ帝国は、太陽神を柱として帝国を拡大した。神に仕える皇帝（インカ）が神聖視され、その権威と命令は絶対であった。インカを頂点に、クスコの貴族、被征服部族の貴族、そして共同体（アイユ）の首長（クラカ）を介し、アイユの成員である膨大な民衆を底辺に置く巨大なピラミッド社会が形成され、徹底した秩序が貫かれていた。征服のあかしとして太陽神を各部族神の高位に据え、ケチュア語教育を普及させた。反乱防止と文化的均等化のために、一部住民を強制移住させ相互に牽制・監視させた（ミティマエス）。アイユ民衆は、インカとクラカの土地を共同で耕作する義務を負い、公共事業や軍役に徴用された（ミタ制）。インカは、クラカを通じて莫大な民衆を動員し、灌漑網の整備、インカ道など道路整備やサクサワマンのよな城砦の建設を行ない、帝国の統合をはかったのである。インカやクラカは、税を徴収する代わりに余剰物資をアイユ民衆に気前よく再分配し、老人や病人を加護し、その権威を高めた。インカとアイユの間には、クラカを軸に、人類学という贈与と反対贈与の原則（互酬）が働いていたといわれている。

征服後の混乱のあと植民地経営は、副王フランシスコ・デ・トレドの時代（一五六九―八一一年）に確立された。トレドは、ビルカバンバを攻撃し、インカの正統なる末裔トゥパク・アマールを殺害してインカの抵抗にとどめをさし、クロニスタ（年代記者）を動員してインカ時代の悪政を暴き、征服の正当性をめぐりラス・カサスへの反駁を行なった。人口の激減に対応して、

分散したインディオ集落を再編成し、先住民支配を確固とし、徴税とキリスト教化の効率化をはかったのである。初代副王ヌニェス・デ・ベラ（一五四二年）から最後の副王ホセ・デラ・セルナ（一八二四年）まで四〇人の副王がつとめた。

植民地支配は、植民地の最高官吏である副王を頂点に、司法権と行政権を兼ねるアウディエンスシア、各地区を統括するコレヒドールから成り、スペイン生まれの貴族や軍人がそれぞれ任命され派遣された。インディオ民衆と直接対峙したのはコレヒドールである。スペイン人は、インカ時代のアイユの首長クラカとアイユ民衆の関係を利用して支配を行なった。征服と植民地支配に協力的だったクラカを残し、それを通じてアイユ民衆から、租税、コレヒドールの蓄財の重要な源である物資の強制割当て（レバルト）、鉦山などへの強制的な労働徴用（ミタ）、土着信仰の破壊、教会税の徴収を行なった。クラカは、クスコでスペイン語と西欧化教育を施され、インディオ民衆とは別格に扱われた。インカ時代とは異なり、スペインとアイユ民衆の関係には互恵的な性格が薄れ、一方的な収奪関係が強められた。植民地時代クラカは、アイユに対して一種の中間搾取者としてデリケートな立場を強いられたが、ガブリエル・コンドルカシキ（トゥパク・アマル二世）のように、節度を超える収奪には、ときにアイユを擁護して抗議行動を起こすこともあったのである。

分断して統治する

植民地では国王がすべてだった。インディオは臣下であり、土地と資源も王家の所有物であった。国王は、土地、インディオなどさまざまな特権を介して、副王など植民地官吏を家産官僚として任命し、支配を委任するわけであり、人格と情実を基礎とする親分と子分の関係によつて支配を築いたのである。独裁制や権威主義、規範や制度でなく人格を軸に展開されるペルソナリズムや、政治の恣意の伝統が強化された。今日まで官職が一種の特権となり、権限領域があたかも個人の利益拡大のための封土と化し、袖の下と人のつながりが物事を進める基本エンジンとなってきた。現代政党の内部にも、創設者である最高指導者を頂点に、そうした古い関係に基づき底辺を欠いた三角形で数珠のようにつながれる構造が厳として生きているのである。

公式には日常の些事にいたるまで国王が介入したが、スペインと植民地の間には距離があり、国王の名で出されるおびただしい命令がそのまま実行されたわけではない。むしろ「尊重されるが遵守されず」が現実の法運用の美風であり、状況に合わせて法を恣意的に運用する一定の法慣行の伝統を形成した。ここに、独立後の形式的な立憲主義秩序と実際の寡頭的半封建的秩序との乖離の遠因や、国民の間に深く根ざす法に対する不信感の源泉をみることができるといえる。

また国王は独立した土地貴族が植民地で成長するのを防ぐため、任期の限定、植民地での経済的・家族的な結びつきの禁止、査察使やスパイによる行政監督のほか、権限の境界を曖昧に

して、臣下を相互に競合・牽制させた。係争が発生すると王の家父長的調停により解決した。この「分断して統治する」支配は、社会に相互の不信感と嫉みを植えつけ、横に結束する力を弱め、植民地社会に自治を育てる条件を与えなかった。この遺産は独立直後の混乱を不可避免とし、国民統合の欠如、社会的結束の弱さとともに、非合意社会の形成にあずかったといえるであらう。

植民地社会は、血統と家系、民族を基礎とするカースト的分断的な身分社会を形成せしめた。つまり副王を頂点にスペイン人の貴族、高官、大商人を支配集団として、その下に植民地生まれのスペイン系白人、メスティソなどさまざまな混血、クラカ（カシケ）、インディオ民衆、奴隷という新たな階層秩序をつくりあげた。王権を軸に、血統の純粹さの原則に基づき、異なる権利と義務をもつ集団に分けられ、支配と服従関係が下方に再生産される。植民地時代の反乱が、それぞれの属する集団を越えて横に結束し植民地秩序を否定する大運動にならなかったのも、分断して統治する原則のほかに、そうした社会の性格に理由があるといえよう。

この階層秩序は、近代的な階級社会と大きく異なる複雑な面をもっている。大家族主義や大農園にみられたように、白人の主人や家族と使用人の間には単なる収奪だけではない温情主義的な面も強く、貧しいインディオやメスティソでも大家族の一員となることで、自らも主人の支配的文化と価値観を身につけ、そうでない者を蔑視する。貧しい者の敵は概して貧しい者で

ある。

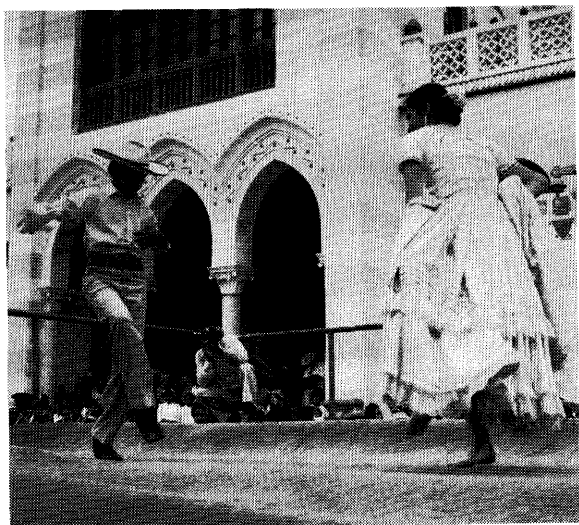
筆者が初めてペルーに長期滞在をしたときのエピソードを紹介しよう。赴任直後、車もなく地理もわからず行動を制約されていた私は、ぐずる子供たちを連れて近くの公園にでかけた。夏の南国の日差しがまばゆい日だった。閑静な住宅街の一角にあり、有名なクロニスタの名をもつその公園では、週日は看護婦のような白い仕事服を着た混血のメイドないしはベビーシッターが主人の子供たちと遊んでいる。ある時、六歳の長男とほぼ同年齢と思われる男の子が話しかけてきた。驚きのあまり何度か聞き返したが、それはやはり「エレス・ポブレ」(おまえは貧しいのか)という問だった。これは正直いってショックだった。たしかに子供たちに靴下もはかせず、ウィークデイの昼間、大の男が子供の面倒をみている私の姿は、彼らにはポブレと映ったにちがいない。しかもメイドたちが、ひそひそと彼らに、そう教えているらしい。どうころんでも拭えぬ私と子供たちのオリエンタルな容貌が、彼らに一種の優越感を与えているふうでもあった。私はその時、この国の階層社会の複雑な一面を垣間みた気がしたのである。

クリオリヨ文化

クリオリスモというべき伝統がある。『リマ、このおぞましきもの』という名著を残した作家S・サラサル・ボンディによれば、クリオリヨという言葉は元来、アメリカ大陸で生まれた黒人奴隷の子供を意味したというが、独立時代には植民地で生まれたスペイン人あるいは混血をさすようになった。総称してリマや海岸部で生ま

れ根づいた特有の文化、生活習慣総体を
さす言葉である。タパダと呼ばれるマン
トで顔を覆う女性、牛の心臓の串焼きで
あるアンティークーチョ、葡萄の蒸留酒の
カクテルであるピスコ・サワーなどの食
物や飲み物、マリネラやワルツの踊り、
「奇跡の主」の行列などすべてが含まれ
る。

ここで問題にすべきはクリオーリオ的
といってよい行動様式、土着の白人文化
のなかで育まれ、貧困層にまで共有され
てきた価値観である。カースト的な固定
の社会、大家族で固められた社会におい
て上昇しようとする人々の間に生まれる
政治態度である。それはビバサ・クリオ
ーリオという的確な表現に集約されよう。



マリネーラを踊る若者たち(ピスコにて)

サラサルによればそれは、物的利益のためには主義主張を度外視しても反対の側につく、反道徳的な柔軟さでもある。

正面きつての議論や対決ではなく、権力者へのへつらいやすり寄り、陰謀を通じて支配層の一隅に潜りこみ、特権にありつこうとする態度、そして同じ上昇指向をもつ者への嫉み、中傷、陰口が特徴となる。十九世紀の思想家ゴンザレス・プラダが「こそこそと話す暗黙の合意」と批判したものである。噂や中傷が政治を動かしてゆく社会である。いまこの瞬間にも、瀟洒な屋敷のサロンで、パーティーの席やバーで、大統領や政治家や誰その悪口が交わされ、陰謀がねられているのである。

この社会においてビボたる者（賢い者）は、状況に敏感でなくてはならない。それを利用して自己の利害を最大限に高めようとする。まさに今日でもクリオーリヨ社会は生き馬の目を抜くピカロの世界である。いつときも気を許してはならない。ここでは、賄賂や腐敗はさけられない。すべてが商人だからである。法や良心に則って行動する者はトント（愚かな者）である。ペルアニスモにあるように、「賢い者（ビボ）はトントを支えに生き、トントは自らの労働で生きる」のである。

規則を状況によつて勝手に解釈するのがクリオーリヨである。道路で、すきあらばすぐ車線を変え割り込む。信号が壊れたり停電になると、我先に交差点につっこみ、身動きがとれなく

なる哀れさがあるが、行動は利己的短期的だ。それを取り締まる警察も規則を盾に私財を蓄えようとする。車の運転にとどまらない。経済政策が変われば、企業家もすこぶる変わり身が早い。国のため、社会のため、全体のためを考えて行動するのはトントである。すべてが短期決戦であり、党利党略、個別利益が優先される。寒流にその名をとどめているドイツ人博物学者のフンボルトが独立前夜のペルーを訪れ、この国にはあらゆる面で「冷たい利己主義」がはびこっていると記述したが、的を射た現代ペルー社会まで見通す観察であった。

ペルー社会には、過去が重層的、かつ重く残っている。かび臭い植民地的な伝統が、隷属からの解放、自由と平等に重きを置く独立後の伝統とともに息づいている。社会はめまぐるしく変わり、植民地的伝統も大きく変わりつつある。しかし中間層や民衆層の間にもそうした過去や伝統が再生産されている。政党、労組すべてにそうした影が深く刻み込まれているのである。

4 失われた機会

独立戦争と太平洋戦争

ペルーが共和国として独立を宣言したのは一八二一年七月二八日である。よく知られているように、スペイン植民地支配の牙城であっ



硬貨に使われたエスクード(紋章)

たため王党派の抵抗は最後まで強く、南からアルゼンチン、チリを解放したサン・マルティンが海岸部から攻略して独立を宣言し、北部アンデスを解放したシモン・ボリバルの指揮下に一八二四年アヤクチョの戦いで最終的にスペイン王党派を制圧することとなり遂げられた。他律的なものであった。翌年制定された中央に白、両側を赤で三分した国旗は、サン・マルティンの原案に起源を、また左にビクーニャ、右にキーナの木、下にコルヌコピア（豊かな山羊の角）

からこぼれる金貨、つまり自然の豊穡をあらわしたエスクード（紋章）は、ボリバルが考案したものである。

また戦争でスペイン系家系がある程度没落したが、独立は、基本的にペルー生まれのスペイン系白人が本国から解放を勝ちとったわけであり、メキシコのように民衆を巻き込む運動が展開されたわけでもない。インディオを底辺に置く階層秩序、半封建的社会経済構造には手がつけれられない政治革命だった。独立で、自由主義、共和制などフランス革命と米独立革命の理念が法制度の建前となったが、現実はその

れとは大きくかけ離れていた。つまり、市民の存在を前提としない、ごく少数の特権をもつ裕福な人々の間の自由と平等であり、権力の圧倒的不平等を特色とする国民不在の「国民国家」の誕生だった。しかも中央集権にもかかわらず、中央の統治は全国に及ばず、大多数の国民は大地主や地方の有力者に委ねられたといつてよく、地方の半封建化はむしろ強化された。さらに自由主義思想は、植民地時代に教会によって与えられていた庇護をインディオ住民から奪い、地主による共有地の侵食、大土地所有制拡大の条件を与える結果となったのである。

国民統合をみるうえで興味をそそられる事件は、先にふれたチリとの「太平洋戦争」である。対外戦争は本来、ナショナリズムを高揚させ、統合への弾みとなる機会であるが、この戦争はペルーの統合の遅れを際立たせるにすぎなかった。対戦国チリと同質な国民形成に基づく統合度の高さと独立以降の安定と発展の差が、勝敗を決したといえる。戦争のさなかでもペルーの指導者たちは結束することができず、戦局不利とみた大統領イグナシオ・プラドにいたっては、欧州で武器を調達するとの口実に国を遁走した。そしてタラパカの戦いに敗れ制海権を奪われると、首都は簡単にチリ軍に占領された。記録によれば、この時病院を視察したチリ軍将校の質問に対し、病床のペルー兵たちは、「ピエロラ將軍」や「カセレス將軍」のために戦ったと述べ、その口から「ペルーのために」戦ったとする証言を得られなかったという。

またチリ軍は、アンデス山中に逃げ込んだカセレス將軍率いるレジスタンス軍を追討したが、

作家ロペス・アルブハルは『アンデスの小話』のなかで、この時カセレス軍が農民を兵士に徴用するため、村出身のインディオ兵士を使い、チリの残虐非道さを訴え、ペルーのために戦うよう農民たちに懇願する場面を書きとめている。このときチリやペルーの存在すら知らないインディオ農民たちは、ペルーとは地主支配者（ミステイ）に他ならず、「なぜ地主たちと大義を共にしなくてはならないのか」と問い返した。最近の研究では、チリ軍の侵攻を前に農民たちが民族主義に覚醒し、「共通の大義のために」戦うべく動きはじめたとき、農民たちの動きを社会秩序にとって脅威とみた地主たちは、農民兵を敗走させるのである。逆に海岸部の大農園で、チリ軍は半奴隷的待遇を受けていた中国人労働者クーリー（苦力）を解放するが、これに反発した地主たちは黒人を使い、中国人を追いつくという国民統合の難しさを物語る場面があった。

貴族的共和制と 旧秩序の形成

さて、前述のように十九世紀末には、輸出ブームを背景に「貴族的共和制」とよばれる文民支配が確立される。海岸部のプランテーション所有者、輸出業者とアンデスの伝統的自足的地主層の同盟による寡頭支配体制（オリガルキア）がそれだった。制限選挙で、有権者人口は総人口の約三%と限定された。一八九五年の「ピエロラ革命」から約二十年間続く制限的議会主義の時代は、現代史上稀にみる安定した時代である。軍がドイツの軍事顧問の下で近代化されたように、この時期に近代国家の体



サンマルティン広場とホテル・ポリバル

裁が徐々にできあがった。しかし貴族たちは、富を国の近代化や国民の生活向上に向けるよりは、むしろ欧州の近代文明の産物、特に奢侈品を輸入したり、子弟を欧州に遊学させるなど消費に向けた。

大統領宮殿の広場につながる目抜き通り、ヒロン・デラ・ウニオンには、ヨーロッパ直輸入の店やカフェが開かれた。クルー・デラ・ウニオン、クルー・ナシオナルといった貴族たちの排他的なクラブを中心に社交界も賑わいをみせた。最近でこそ、アンデスから下りてきた民衆たちがそこを埋め尽くし、すっかり変わってしまったが、ピエロラ通りからサンマルティン広場にかけて見られるホテル・ポリバルなど荘厳な建造物は、当時の繁栄のよすがをわずかにとどめている。

だが支配層は、表面の安定とは裏腹に、内部は一枚岩ではなく、家系や個人の利害、糖業・綿業など産業の利害をめぐりさまざまに対立していた。コロンビアの寡頭層のように、自らの支配を正当化し永続化させるため、自由主義や保守主

義といったイデオロギーを基礎に、中間層などを引き入れた全国的な政党を組織することもしなかった。もとより「維持するために改革を」という英国のバークの警句に込められたような保守主義の美風はもたなかったのである。それゆえ一九一二年都市労働者をバックに政権についたビリングルスや、一九一九年に独裁政を打ち立てたレギーアのような上昇指向型の人物の登場を防ぐことはできなかった。また中間層、労働者層が台頭してその支配が揺らぐ三〇年代以降、彼らは支配を確保するため軍部の庇護の下に逃げ込まざるをえなかったのである。

民族主義と社会主義

両大戦間期には、都市において学生運動と労働運動、プランテーションにおいて農民運動が活発化し、サンディカリズムや社会主義の影響を受けて、ペルーでも少数地主支配への批判と反発が高まった。共産党を創設して社会主義運動を展開するホセ・カルロス・マリアテギと、アプラ党を創設して民族主義運動を率いるピクトル・ラウル・アヤ・デラ・トーレに代表される二つの潮流があった。

アヤ・デラ・トーレは、トゥルヒーリヨの上流下層の出身で、リマのサン・マルコス大学で法律を学び、学生運動で頭角を現した。リマの労働者と接触し、一九一九年には八時間労働を要求する労働運動を支持し、寡頭体制の打倒のためには知識人と肉体労働者の同盟が必要との認識に達した。二三年、レギーア独裁政権により国外追放となり、パナマ運河での米国支配とメキシコ革命の成果を目のあたりにし、二四年、亡命先のメキシコでアプラ運動（アメリカ人

民革命同盟）を創設した。反ヤンキー帝国主義、ラテンアメリカの政治統一、土地と産業の国有化など五大綱領を掲げ、米帝国主義と連携する地主寡頭支配に対抗する大陸規模の民族主義的改革運動としてラテンアメリカ諸国に大きな影響を及ぼしたのである。

改革の担い手についてアヤは、資本主義の未発達のところでは労働者階級も未熟で社会主義革命を独自で担うことは不可能である、革命の中心となるべきは、帝国主義の浸透で最も被害を受けている中産階級や中小の地主、商人であり、知識人が指導する両勢力の同盟が不可欠と説いた。他方で、古典的マルクス主義の論理に沿って、後発諸国では帝国主義は資本主義の第一段階であり、発展するためには資本と技術が不可欠であるとし、反帝国



ラテンアメリカ諸国の国旗に囲まれたアヤの墓。民族主義的改革運動のリーダーとしてラテン諸国に与えた影響は大きい。

主義国家を樹立して民族主義の立場から帝国主義勢力との交渉によりそれらを獲得することが必要との立場を明らかにした。これは基本的に、中産階級を中心とする民族主義的改革主義の立場であった。

これに対し、ジャーナリストとして身を立て、古典『ペルールの現実に関する七評論』の著者で知られるマリアテギは、ペルールの資本主義が独占的帝国主義勢力の付属物にすぎないとして、その自律的發展の可能性を否定し、ブルジョア革命の使命を果たしえないと断罪した。また寡頭支配層の文化やその支配におもねる中産階級の模倣的性格を指摘し、いったん政権につけば帝国主義勢力と提携して、真の民族主義政策を担うことはできないだろうと看破し、中産階級を革命運動の担い手の中心とすべきとするアヤの考えを論駁したのである。そして人口の五分の四が農民であり、アイユに基づく原始社会主義が共同体に残っていることに着目し、革命の担い手も労働者階級を中心とし農民層を主たる同盟と規定し、中産階級はこれを補佐するものとした。民族問題は、帝国主義勢力の一掃と社会主義の建設によってはじめて解決されると考えられたのである。

この立場は当時の国際共産主義運動からは異端視されたが、マリアテギは社会主義はソ連モデルを踏襲するものではなく、それぞれの条件にみあった「英雄的創造」でなくてはならないと主張し、一九二八年ペルー社会党を、二九年労働総同盟を創設した。しかし三〇年に三六歳

で早逝、死後、社会党はコミンテルンの支配下に入り共産党と改められ、マリアテギの独創的
社会主義の理念が現実に生かされることはなかった。だからその理念は、社会主義のユートピ
アとして、社会主義圏の崩壊を目のあたりにしている今日まで、極左ゲリラにいたる左翼の知
識人や政治勢力のなかに脈々と息づいている。ペルーの左翼は基本的にマリアテギスタといっ
ても過言ではないのである。

挫折する改革 運動アブラ

さて、一九三〇年の世界恐慌により政府財政は破綻し、一九年から十一年間
続いてきたレギーア独裁政権は民衆暴動のなかで倒壊した。アヤが亡命先か
ら帰国し、リマの中間層と労働運動、トゥルヒーリョの糖業労働者を、ペル
ー・アブラ党の下に組織化し、翌年の大統領選挙に向けて急進的な大衆運動を展開した。寡党
支配層はアブラを共産主義とみなしたが、独自で候補をたてることはできなかった。ポスト独
裁政権の情勢下にあつて、都市大衆や労働者の政治参加を無視できなかったからである。そこ
で南部最大の都市、アレキパで決起し独裁政権を倒した英雄で、混血のサンチェス・セーロを
閥閥と経済力をもつて陣営に引き入れ、擁立した。三一年選挙は識字成年男子すべてに選挙権
が与えられる第一次普通選挙のもとで行なわれたが、結局、都市民衆や未組織労働者の支持を
受けたサンチェスが当選した。

アブラ党は選挙に不正があつたと非難し、政府の弾圧にもかかわらず、「アブラのみがペル

ーを救う」(SEASAP)という好戦的スローガンをかけ政府攻撃を行なった。一九三二年七月トゥルヒーリヨにおいて、アプラ黨員が軍人を引き入れて蜂起し、同市全域を制圧、将校を含む軍人約六〇名を殺害した。これに対する軍の報復で、アプラ側市民が市郊外のチャンチャンの遺跡で多数殺されたといわれる。この「トゥルヒーリヨの虐殺」事件は、翌三三年、アプラ青年によるとみられるサンチェスの暗殺を経て、軍とアプラという最も組織化された中産階層を基盤とする勢力間の埋めようのない溝と対立を決定づけることになった。さらに寡頭支配層を代表する名門家系で、『エル・コメルシオ』紙のオーナー、ルイス・ミロ・ケサダが暗殺されたが、この事件でアプラは、支配層のなかで言論界に絶対的な力をもつ同紙を敵に回すこととなったのである。

こうして寡頭支配層と軍部、アプラ党の三極構図が形成され、軍部が基本的に支配層の利害を擁護し、国家主導型の開発と改革をめざす近代大衆政党を弾圧し、その政権到達をはばむという悲劇が生まれる。この構図は、皮肉にも一九六八年の左翼軍事革命政権の登場まで維持されるのである。

アプラ党は、労働運動を擁する最大の組織政党としてペルー政治に影響を及ぼすのであり、国内勢力をアプラ対反アプラに分極化させ、現代政治の歩みを不安定なものとした。その後、一九六八年までに六年の任期を全うした文民政権が、第二次大戦時という異常な環境下に成立

した第一次ブラド政権のみであったことは特筆されてよいだろう。

ともあれアブラ党は、長期にわたり迫害を強いられたため、創設者アヤへの絶対的帰依を軸とする堅い団結、垂直的構造、突撃隊を擁した戦闘的体質や閉鎖主義を育むとともに、「この世に天国を」といった擬似宗教的家族主義、白いハンカチ、ラ・マルセイエーズなど独特の党文化を形成した。一九五〇年代半ばには支配層と妥協し、親米的となり、今日では社会民主主義の立場をとっている。外部には思想的変節ともみえるが、それはイデオロギー上の要請からというよりは、状況に応じた大家族としての党の利益を優先してのことであった。アプリスタとして生まれ、育ち、アプリスタと結婚し、アプリスタとして死んでゆくのがアブラ党員の一生である。それは一種の結社にも似た存在で、そのなかでは批判的精神や民主的精神は育ちにくい。左翼知識人が五〇、六〇年代に一齐にアブラを離れたのもそこに原因があった。